様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０９５４

研究課題名（和文）２０世紀中葉の米国の地誌研究からみた沖縄と台湾の比較研究

研究課題名（英文）Geographic Studies on Okinawa and Taiwan by the Mid 20th Century America

研究代表者
泉水　英計（Sensui, Hidekazu）

神奈川大学・経営学部・教授

研究者番号：２０４０９９７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：第二次世界大戦から冷戦初期にかけて軍や政府との連携のもとに発展した米国社会科学による東アジア研究について、一例として、台湾軍政計画や占領下琉球での民事行政に深く関与した米国人歴史家ジョージ・Ｈ・カー（１９１１－１９９２）の活動に注目し、各地に散在する彼の個人文書および彼が業務のなかで作成した公文書を網羅的に調査して包括的な資料収集をはかり、それぞれの地域の専門家との相互補完的な共同作業のもとで読解と分析をすすめ、具体的な位相において明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examines a development of East Asian studies in the mid-twentieth century America, which was a result of military- or government-academic collaboration. An American historian, George H. Kerr (1911-1992), who engaged himself in planning a military government on Taiwan and civil affairs operations in Okinawa, was singled out as an exemplary case. His personal papers,as well as official documents he made in his service, which have been separately kept in widely scattered collections,are extensively searched. By reading and analyzing these materials,with help by other area specialists, this study illuminates that particular development of East Asian geographic studies in its concrete dimension.

研究分野：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学　沖縄　台湾　軍政　冷戦　地誌　米軍

１．研究開始当初の背景

２０世紀中葉の米国では、太平洋戦争の遂行と、その後の冷戦体制下での国家戦略上の要請から東アジアへの関心が一気に高まった。同地域を専門とする人類学者、歴史学者、地理学者が軍や政府に動員され、そのなかから、また、新たに日本語の訓練を受けて、情報将校や民政官が養成される。その結果、それまでは看過されがちであった帝国日本とその植民地・占領地の地誌研究は飛躍的に発展した。軍や政府と連携した米国の学知のこの展開について、具体的な史資料の掘り起こしによって実証性を格段に高めた研究が増加している。人類学についても、戦時の軍政計画への参与から戦後の「地域研究」の確立に至る学術組織の変遷が、近年に公開された情報機関の公文書を活用することで、確実な証拠にもとづいて明らかにされつつある。

このような研究動向に導かれた研究代表者は、米国施政権下の琉球列島で米国の社会科学者がおこなったフィールド調査について、業務書類や内部報告書などの一次資料を収集し、東西冷戦という政治的文脈においてこの調査がもった意味を明らかにするための研究をおこなった（「占領期琉球における米国人の地誌および社会調査の歴史的研究」基盤研究Ｃ（一般）平成２２年～２４年度）。沖縄における米国社会科学の活動については、長期の米国施政権のため社会的影響が相対的に大きかったにもかかわらず、学史的な検討がこれまで手薄であった。研究代表者が口頭で発表したり論考として出版したりしたその成果は、占領史研究におけるこの欠落をある程度は埋めることができたと考えている。

この研究の材料となった資料群の一つに米国人歴史家ジョージ・Ｈ・カー（１９１１－１９９２）の個人文書があった。軍や政府との密接な関係のもとで台湾と沖縄でそれぞれ調査研究に従事した彼が収集した資料と、彼が業務のために作成した文書類には、当然のことながら、地政学的に両地域を結びつけて理解する姿勢が色濃くあらわれていた。そこで、沖縄と台湾との関連に焦点をあてた考察を試みたが、その際に、台湾沖縄関係を軸にした研究のもつ可能性の広がりを感知すると同時に、これまで沖縄研究に従事してきた研究代表者にとって、台湾研究の専門家との共同作業が不可欠であることを痛感した。このような経緯から、台湾でカー文書の研究を進めている連携研究者を招き、同文書の整理、解読および分析を相互補完的におこなう計画を立てるに至った。

２．研究の目的

第二次世界大戦から冷戦期の米国で急速に発達した東アジアの地誌研究を媒介にして沖縄と台湾の地政学的な位置づけを試み、境界領域の文化や社会、歴史について新たな理解を導くことに本研究の目的を置いた。具体的に述べれば以下の３点である。

（１）１９４０年代から１９８０年代に、沖縄と台湾を連続した一つの地域として捉え、当地の地誌研究を進めた米国人歴史家ジョージ・カーの個人文書を研究の基礎資料とし、台湾研究の立場から同文書の調査に従事してきた連携研究者との緊密な共同作業を進めることで資料群の全体像を把握すること。

（２）沖縄と台湾を自立した研究対象として理解すること。沖縄を日本の周縁と位置づけたうえでの議論、あるいは、台湾を大陸中国人の開拓地とみたうえでの論述、すなわち、日本や中国といった大国の辺境と位置づけて、それぞれの大国と結ぶ関係という枠組みのなかで沖縄あるいは台湾の歴史的存在を論じるのではなく、従属関係を暗黙の前提とする大国の視点から分析対象を解き放ち、境界領域そのものの特性をより積極的に検討すること。

（３）沖縄と台湾の比較研究において、植民地経営を切り口にした帝国日本の研究ではなく、また、複数の植民地の統治制度の運用形態やそれを支えるイデオロギーの比較対照でもなく、異なる植民地間を移動した実在の人物という具体的な位相において記述すること。

３．研究の方法

カーは戦前の東京で日本美術史の研究を始め、その後１９４０年まで台北高商や台北高校の教員をしていた。日米開戦後に軍の情報機関の台湾担当となり、海軍軍政学校で台湾侵攻作戦に備えた地誌研究の指揮をとる。終戦後は大使館付武官補として台北に戻り、その後、副領事に転じて４７年まで台北に留まる。帰国後はワシントン大学、次いでスタンフォード大学に奉職し、軍の委託事業で琉球史研究を進めた。５７年からはハワイに移住しホノルル芸術院をベースに数次の琉球文化調査プロジェクトを推進すると同時に、台湾史の著作を発表していった。

このような経歴を反映して、彼の蔵書および個人文書は、沖縄県公文書館、琉球大学付属図書館、台北市二二八紀念館、スタンフォード大学フーバー研究所、ホノルル芸術院に分散して保存されている。ただし、機関によって利用の利便性が大きく異なっていた。たとえば、沖縄県公文書館の資料は、詳細な『沖縄県公文書館所蔵ジョージ・Ｈ・カー文書目録』（平成２３年）が用意され、一般公開されているのに対し、フーバー研究所には荒目録しか用意されておらず、琉球大学付属図書館や台北市二二八紀念館の資料には一般利用者用の目録がなかった。さらに、二二八祈念館の資料は、一部分のみが『葛超智先生文集』および『葛超智先生相関書信集』（ともに２０００年）として陰影本で公開されているのみで、機関として一般利用を前提にした準備がなかった。この問題を勘案し撮影によ

る複写で資料の利用可能性を確保することに留意した。

これらカーの個人文書に焦点を定め、研究代表者が把握している沖縄県内所蔵のカー文書の欠落部分を、連携研究者が把握している台北市二二八紀念館所蔵のカー文書によって補完していくことを基本的作業とし、散在してしまって全体像が見えづらくなっているこの文書群を、目録上および複写データの状態で時系列に沿って本来の連続へと再配置し一覧できるようにつとめた。そのうえで、米国内の他の関係機関に赴いて収集する資料で補完するという方法で分析のための資料を整えた。

４．研究成果

（１）初年度には、まず、資料利用の困難が予測された台北市二二八紀念館に研究事業への協力を依頼し（神奈川大学学長より台北市文化局長宛５月１０日付）、資料の閲覧及び複写に必要な手続きを整えた。

次に、9月１６日より２１日まで那覇に出張、連携研究者を同地に招聘し、琉球大学図書館の所蔵するカー文書および寄贈書籍の調査を共同でおこなった。後者については１９８６年作成の目録を発見することができたが、往時の配架は維持されていなかった。出張中に、沖縄県立博物館にカーの寄贈品があることを知り、これを見学したところ、２２０点の考古学標本と約１０００枚の沖縄調査写真が存在することが判明し、後者についてはデータによる複写を収集した。

つづいて１１月２０日より２３日まで台北に出張、再び連携研究者を招聘し、台北市二二八紀念館の所蔵するカー文書の調査をおこなった。収蔵庫に立ち入り分類の概要を把握したのち、館内用目録から判断して研究上有用とみられる文書を順次取り出して約２７００枚を撮影複写した。ただし、このコレクションの初見であったことから、全体の概要をつかむことを優先した。その結果、戦前期の台北で出版された稀覯本や松山虔三撮影の台湾風物写真、戦中の米国政府出版物なども多数含まれていることが判明した。

上記の概観を踏まえ、翌年３月２４日より２９日まで再び台北に出張、二二八紀念館所蔵カー文書の調査を継続した。前回の調査で収集した資料を読解した結果、アメリカ海軍軍政学校に関連した資料を最優先することとし、この観点から資料の撮影複写を進めた。また、二二八紀念館から特別展企画について相談があり、本研究の成果の一部を利用する可能性を協議した。

（２）第２年次には、カー文書を補完する資料の調査収集をすすめ、とくに第二次世界大戦中の米軍の台湾地誌研究について情報の整理と分析をおこなった。

２０１４年8月１７日より２４日まで、台湾から招いた連携研究者とともにアメリカ東海岸に出張し、在米の連携研究者も現地で加わって３名で資料調査をすすめた。具体的には、①ニューヨーク市内コロンビア大学図書館の学史資料室にてアメリカ海軍軍政学校（Naval School of Military Government and Administration）の運営に関する大学側資料の調査と収集、②ワシントン市内海軍省図書館にて同軍政学校の運営に関する海軍側資料の調査と収集、および③国立公文書館（アーカイブ II）にて、陸軍情報部でカーが作成した台湾地誌（Strategic Survey of Formosa）とその関連資料の調査と収集をおこなった。

収集した資料は、帰国後にクラウドサービスを利用して連携研究者とデータを共有し、共同で整理分析をすすめた。ただし、この資料を利用した論考の執筆はそれぞれが単独でおこなっている。同様の方法で、昨年度収集分の資料も共有データとし、連携研究者は次年度の二二八紀念館での特別企画展について具体的な準備をすすめた。

（３）最終年度には、収集済み資料を活用した報告につとめ、若干の補足的な資料収集もおこなった。具体的には、①東アジア科学史国際会議にて米国海軍軍政学校について、②ジョージタウン大学史学科セミナーにてカーの史観について、③東アジア村落開発国際フォーラムにて米国人による戦後沖縄農村調査とその延長について口頭発表した。論文は、これらの発表内容を組み替えて２本にして発表した。資料収集はこれらの発表機会を利用し、また、後に述べるような今後の研究展望をふまえ、岡山、沖縄、ニューヨークおよびワシントン、台湾、韓国で関連する調査をおこなった。

研究期間全体をふりかえれば、二〇世紀中葉の沖縄と台湾を結ぶキーパーソンの一人であるカーが、戦前の留学および中等教育で、戦中の軍政調査および民事訓練で、そして戦後の台湾外交および琉球史編纂の過程で作成した個人文書と行政文書について、沖縄（琉球大学、県公文書館）、台北（二二八紀念館）、ニューヨーク・ワシントン（コロンビア大学、海軍図書館、国立公文書館）に残る関連文書の調査を一通り終えたことになる。うち二二八紀念館の資料については一般利用できず不明な点が多々あったが、資料受入時の整理担当者を連携研究者に迎えた共同調査の結果、全体像を把握することができた。とりわけ、台湾軍政計画の行政文書は、先行研究者が在米諸機関を探索しても発見できなかった資料であり、米国の東アジア地誌研究を跡づけるうえで意義深い発見であった。

なお、連携研究者の企画案にもとづいて２０１５年6月２４日～１０月２５日まで「台北二二八紀念館典蔵文物特展」が開催され、研究代表者は「計画顧問」としてこれに加わり、6月２３日のプレスリリースで本研究について紹介する機会を得た。これにより、学術研究の社会への還元という責務の一端を果たすことができたとかんがえる。

本研究で収集した資料には、カーがその地誌研究の歩みのなかで関係を結んだ学者や行政官への言及がある。今後の研究の展望として、カーの履歴を縦糸に、このような他の専門家の活動へと横糸を拡げることで、日本本土や旧南洋群島へと視野を開き、２０世紀中葉の米国地誌研究を面としてとらえるような調査研究の見通しを得ることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
（１）泉水英計「米海軍軍政学校における台湾研究―台北市二二八紀念館所蔵カー文書による再構成」『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』第 5 巻、2014 年、83-100 頁、査読無。

〔学会発表〕（計 5 件）
（１）Hidekazu Sensui, "American Research on Post-War Okinawan Villages and Beyond." 2nd Global Forum on Village Development in East Asia, 22 October 2015, Academy of Korean Studies.
（２）Hidekazu Sensui, "Wartime American Research on Colonial Geographies of Japan." Media Cultures of Wartime and Postwar East Asia, Georgetown University, 15 September 2015.
（３）Hidekazu Sensui, "American Research on Colonial Geographies of Japan: With a Particular Focus on the Naval School of Military Government and Administration, 1942-1945." 14th International Conference on the History of Science in East Asia, 6 July 2015, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales.
（４）泉水英計「二つのミンゾク学と琉球研究―金城朝永を焦点に」、第 3 回戦後沖縄研究コロキウム、2015 年 3 月 15 日、沖縄県立芸術大学。
（５）泉水英計「現代沖縄結核史―防遏は米国式技術によるものなのか」、日本科学史学会生物学史分科会シンポジウム、2014 年 11 月 29 日、日本大学。

〔図書〕（計 2 件）
（１）泉水英計「アメリカ人地理学者による冷戦期東アジアのフィールド調査」坂野徹（編）『帝国を調べる―植民地フィールドワークの科学史』、2016 年、勁草書房、199-229 頁。
（２）泉水英計「米海軍『民事ハンドブック』シリーズの作成過程にみるアメリカの対日文化観」桑山敬己（編）『日本はどのように語られたか―海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』、2016 年、昭和堂、151-177 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
泉水　英計（SENSUI HIDEKAZU）
神奈川大学・経営学部・教授
　研究者番号：20409973

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
該当なし

(4)研究協力者
蘇　瑤崇（SU YAOTSUNG）
静宜大学（台湾）・人文教育中心・教授

ジョナサン・ベンダ（JONATHAN BENDA）
Northeastern University (USA)・English Department・Professor.